

国内の畜産物の需給動向

牛 肉

7年7月の牛肉生産量、前年同月並み

生産量

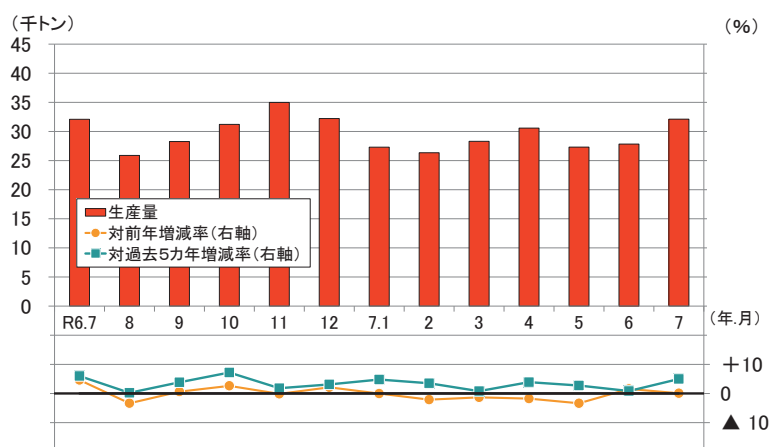
令和7年7月の牛肉生産量^(注1)は、3万2112トン（前年同月比0.1%増）と前年同月並みとなった（図1）。品種別では、和牛は1万7809トン（同5.0%増）とやや、交雑種は8303トン（同1.1%増）とわずかに、

いずれも前年同月を上回った一方、乳用種は5943トン（同12.1%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較では、5.0%増とやや上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：部分肉ベース。

輸入量

7月の輸入量について、冷蔵品は、国内需要が低調な中、現地価格の高止まりの影響などにより、主要輸入先を含むほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、1万7097トン（前年同月比9.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。冷凍品は、主要輸入先のうち米国産はショート

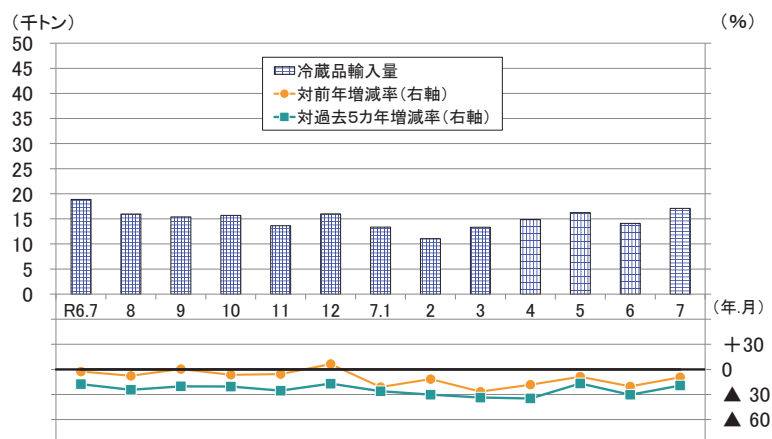
プレート（バラ）の輸入量が現地価格の軟化などにより増加した一方、現地価格の高止まりの影響に加え、輸入品在庫量が比較的高水準であることなどにより、ほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、2万9819トン（同2.1%減）と前年同月をわずかに下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、4万6926トン（同4.9%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は19.3%減と大幅に下回った一方、冷凍品は7.6%増とかなりの程度

上回る結果となった。

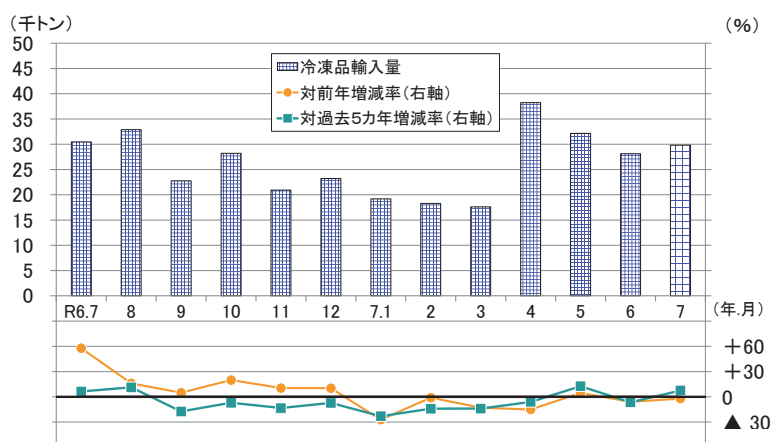
(注2) 輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

7月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は153グラム（前年同月比6.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較では、12.0%減とかなり大きく下回る結果となった。

7月の外食産業全体の売上高は、6月に続き「記録的な暑さ」となり、冷たいメニューやビール類などが好評となった他、好天の中、月後半は夏休みの行楽需要なども好調で、前年同月比8.7%増と前年同月をかなりの程度上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファスト

フードの洋風は、スパイシーな季節メニューや期間限定メニュー、コラボ商品が好調だった他、冷たいドリンクの値引き販促などが好調で、同11.8%増と前年同月をかなり大きく上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、客数がわずかな増加にとどまったものの、猛暑日の割引クーポンや新規投入した麺類メニューが引き続き好評だった他、うなぎなどの季節メニューにも一定の集客があり、同11.0%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、猛暑のため客数が減少したが、客単価の

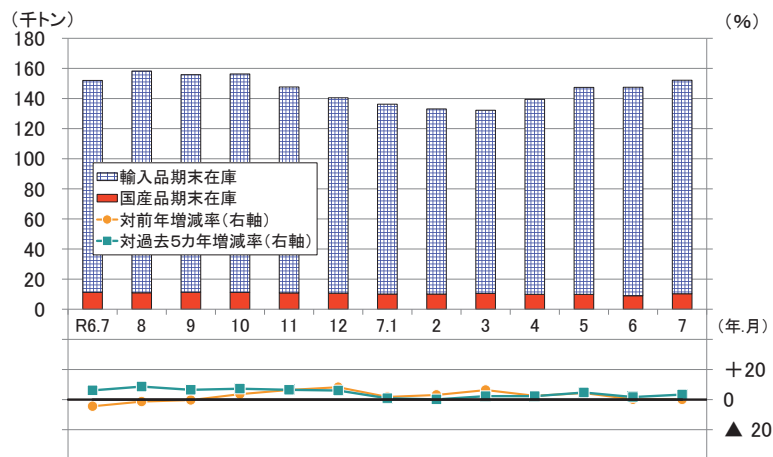
上昇により同2.4%増と前年同月をわずかに上回った。

(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

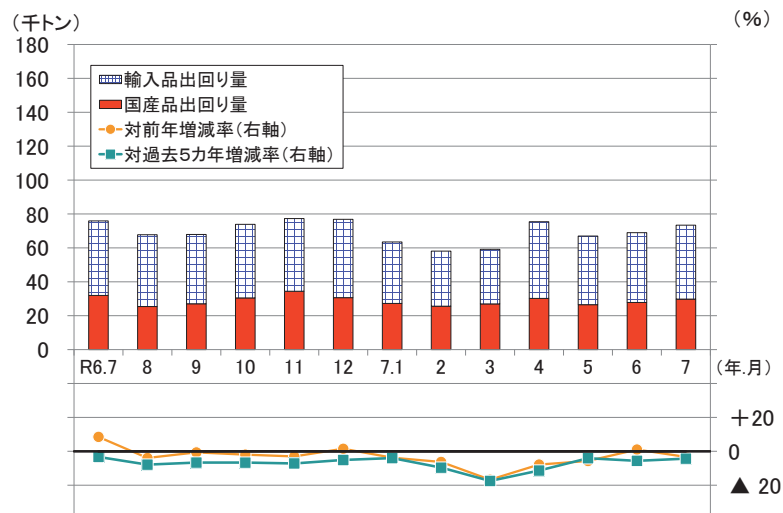
7月の推定期末在庫は、15万2150トン（前年同月比0.1%増）と前年同月並みとなった（図4）。このうち、国産品は1万329トン（同8.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った一方、在庫の大半を占める輸入品は14万1821トン（同0.8%増）と前年同月を

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

わずかに上回った。

推定出回り量は、7万3413トン（同3.3%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は2万9774トン（同6.8%減）とかなりの程度、輸入品は4万

3639トン（同0.7%減）とわずかに、いずれも前年同月を下回った。

（畜産振興部 丸吉 裕子）

豚 肉

7年7月の豚肉生産量、前年同月比2.5%減

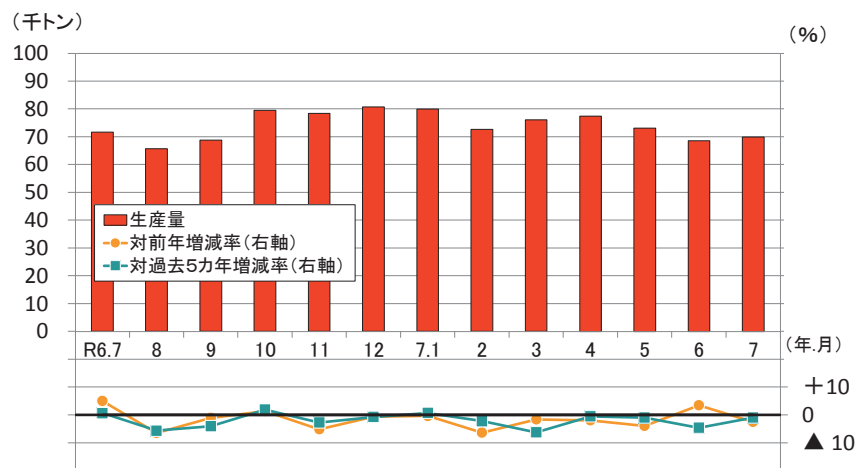
生産量

令和7年7月の豚肉生産量は、6万9871トン（前年同月比2.5%減）と前年同月を

わずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較でも、1.0%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

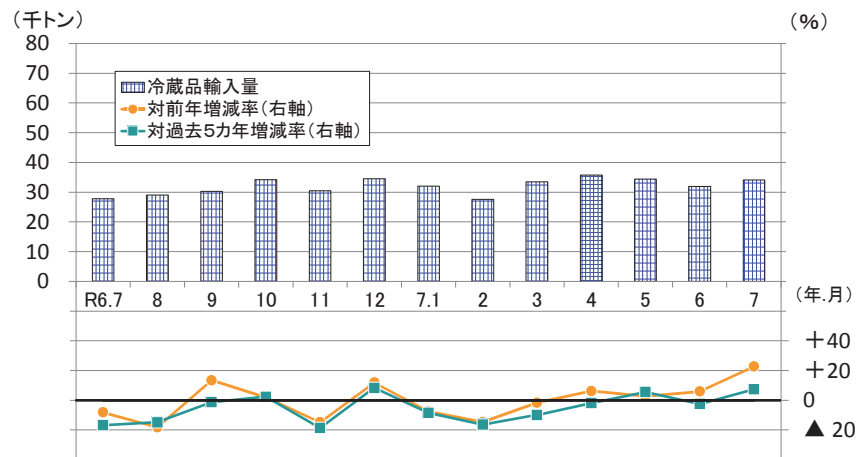
7月の輸入量について、冷蔵品は、米国産の価格が上昇する中、価格優位性が生じたカナダ産が増加したことや、高騰する国産豚肉から需要がシフトした影響などから、3万4169トン（前年同月比22.8%増）と前年同月を大幅に上回った（図2）。冷凍品は、国内の輸出品在庫が多いことや、前年の輸入量が多かった

ことなどから、4万8516トン（同16.8%減）と前年同月を大幅に下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^{（注1）}では、8万2687トン（同4.0%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は7.5%増とかなりの程度、冷凍品は3.4%増とやや、いずれも上回る結果となった。

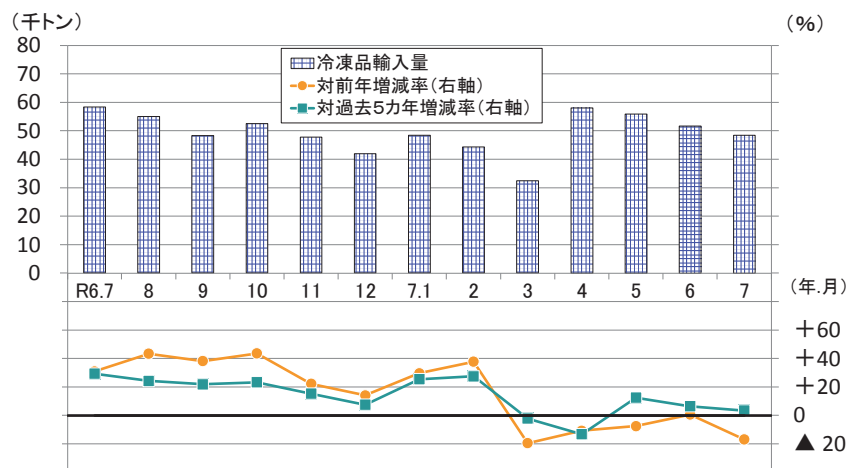
（注1）輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

7月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）^{（注2）}は、602グラム（前年同月比1.9%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較では、0.7%減とわずかに下回る結果となった。

（注2） 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

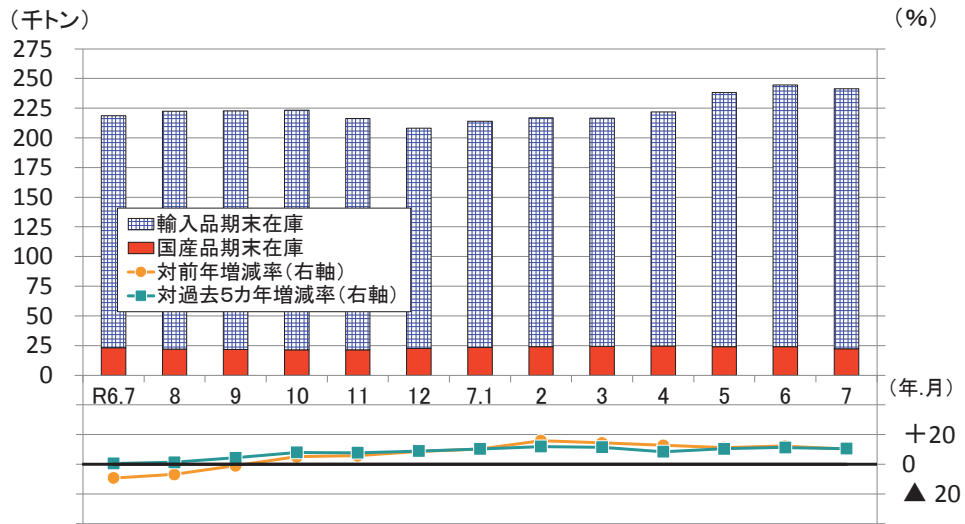
推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫は、24万1504トン（前年同月比10.4%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。このうち、輸入品は、21万9105トン（同12.1%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

推定出回り量は、15万5629トン（同0.8%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は7万1374トン（同2.4%減）と前年同月をわずかに下回った

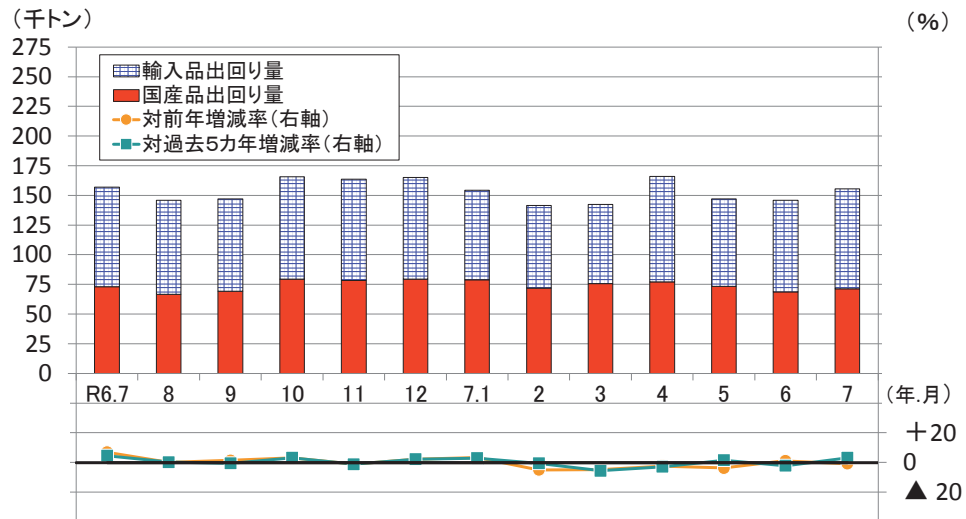
一方、輸入品は8万4255トン（同0.6%増）
と前年同月をわずかに上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

鶏 肉

7年7月の鶏肉生産量、前年同月比2.2%増

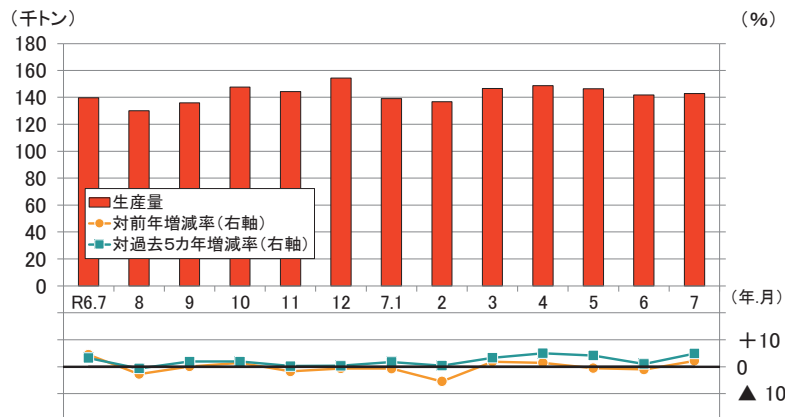
生産量

令和7年7月の鶏肉生産量は、14万2858トン（前年同月比2.2%増）と前年同月を

わずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の7月の平均生産量との比較でも、4.9%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

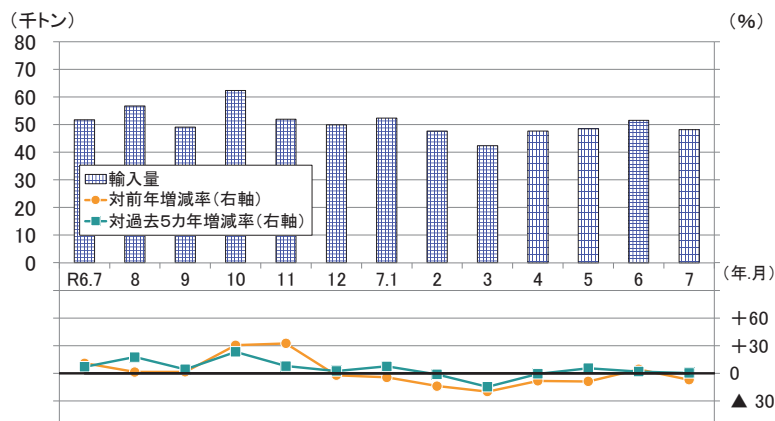
輸入量

7月の輸入量は、全体の約7割を占めるブラジル産が減少したことなどから、4万

8245トン（前年同月比6.8%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。

なお、過去5カ年の7月の平均輸入量との比較では、0.3%増と同水準となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

7月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）^{（注）}は、500グラム（前年同月比4.0%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、1.9%増とわずかに上回る結果となった。

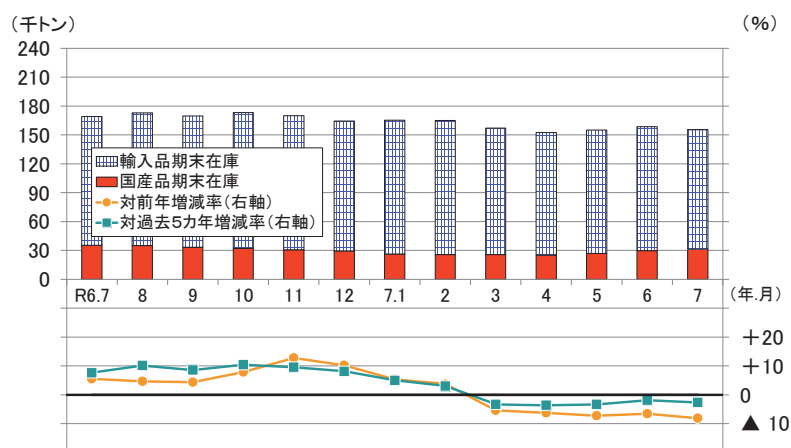
（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

7月の推定期末在庫は、15万5371トン（前年同月比8.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。このうち、輸入品は12万4093トン（同7.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

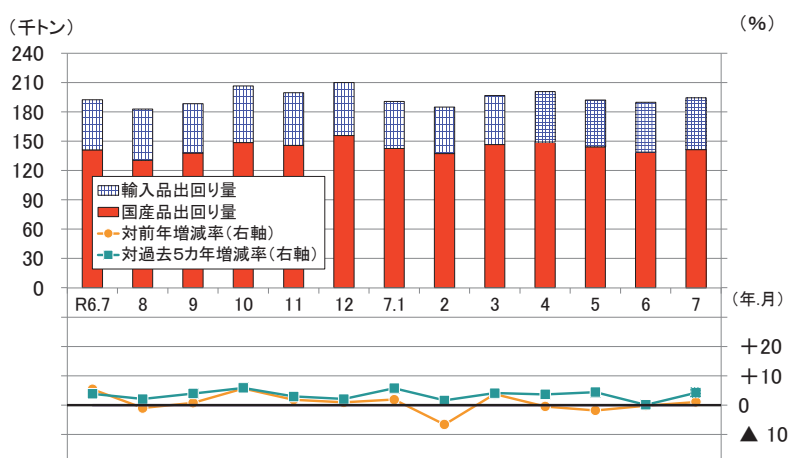
推定出回り量は、19万4343トン（同1.1%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は14万1373トン（同0.3%増）と前年同月並み、輸入品は5万2970トン（同3.4%増）と前年同月をやや上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 越川 紗弥）

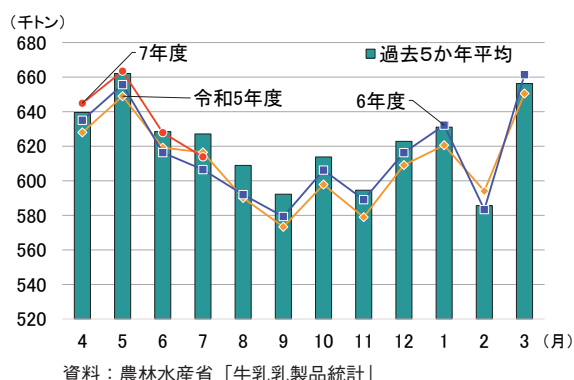
牛乳・乳製品

7年7月の全国の生乳生産量、前年同月を5カ月連続で上回る

北海道の生乳生産量、前年同月比2.1%増

令和7年7月の生乳生産量は、61万3824トン（前年同月比1.2%増）と5カ月連続で前年同月を上回り、前年2月がうるう年であった影響を除くと実質12カ月連続の増加となった（図1）。地域別では、北海道が36万3200トン（同2.1%増）となり、12カ月連続で前年同月を上回った。一方、都府県では25万624トン（同0.1%減）と前年同月並みにとどまったものの、13カ月連続での前年割れとなった。

図1 生乳生産量の推移



7月の生乳処理量を見用途別に見ると、牛乳等向けは33万1182トン（同1.6%増）と、3カ月ぶりに前年同月を上回った。このうち、業務用向けについては2万1804トン（同4.2%減）と2カ月連続で下回った。

乳製品向けは27万8923トン（同0.9%増）と、5カ月連続で前年同月を上回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万

8009トン（同5.3%減）、チーズ向けは3万5280トン（同0.8%減）と、いずれも2カ月連続で下回った。一方、脱脂粉乳・バター等向けは、13万6755トン（同4.1%増）となり、12カ月連続で前年同月を上回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

全国の牛乳生産量、3カ月ぶりに前年同月を上回る

7月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、26万3347キロリットル（前年同月比0.9%増）と3カ月ぶりに前年同月を上回った。成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万7976キロリットル（同5.4%減）となった。一方、加工乳については、1万1304キロリットル（同3.4%増）と2カ月連続で前年同月を上回った。

はっ酵乳は9万1389キロリットル（同1.8%増）と2カ月連続で上回った。

7月のバター在庫量、前年同月比16.3%増

7月のバターの生産量は5473トン（前年同月比7.1%増）と、前年同月をかなりの程度上回り、5カ月連続での増加となった（図2）。出回り量は6162トン（同0.4%減）と2カ月連続で下回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量については、11カ月連続で前年同月を上回り、7月末は3万2274トン（同16.3%増）となった（図3）。

図2 バターの生産量の推移

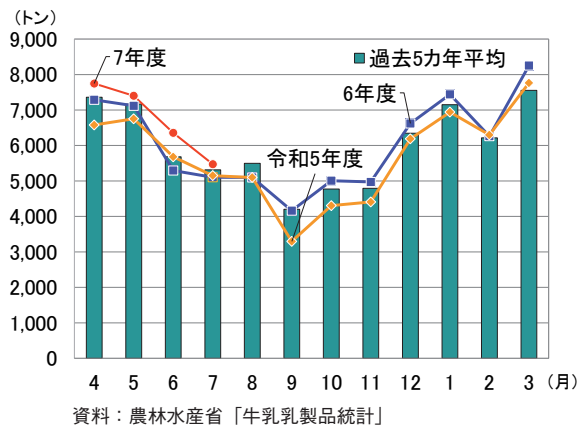


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

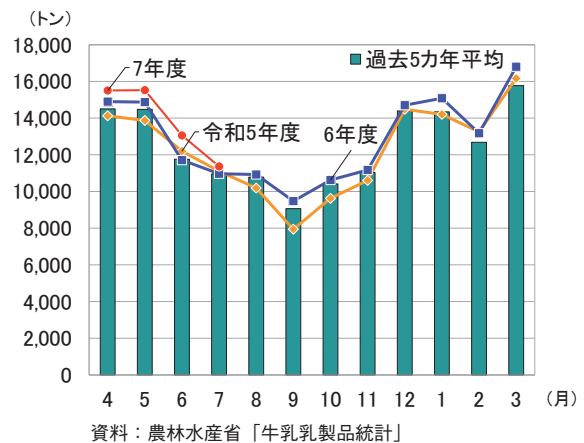


図3 バターの在庫量の推移

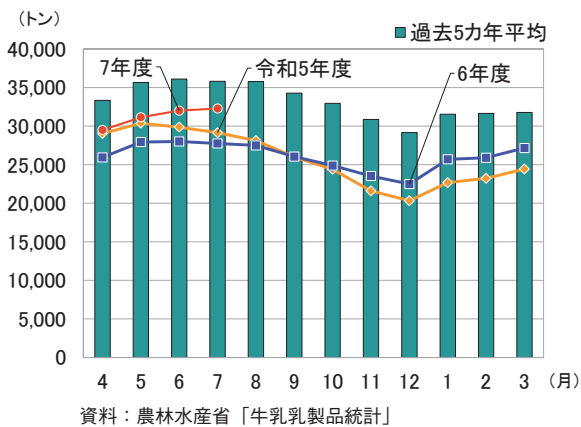
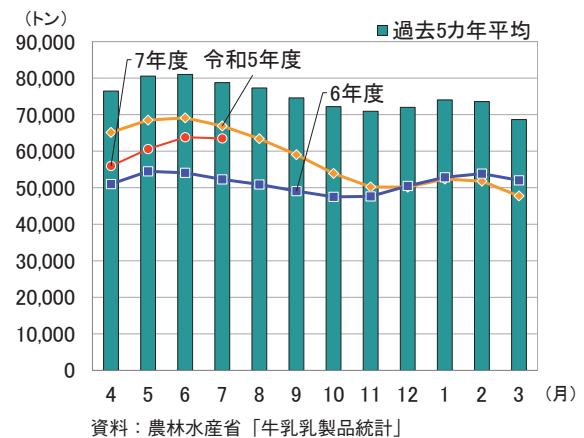


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



7月の脱脂粉乳在庫量、前年同月比21.5%増

7月の脱脂粉乳の生産量は、1万1366トン（前年同月比3.6%増）と5カ月連続で前年同月を上回った（図4）。一方、出回り量は1万1782トン（同8.9%減）とかなりの程度下回り、6カ月連続の減少となった（農畜産業振興機構調べ）。7月末の在庫量は、6万3502トン（同21.5%増）と大幅に増加し、8カ月連続で上回った。（図5）。

令和7年上期の酪農品の輸出量、前年同期比3.5%減

令和7年8月4日に農林水産省が発表した「農林水産物輸出入情報（令和7年6月分）」によると、本年上期（1～6月）における酪農品の輸出量は、9672トン（前年同期比3.5%減）と前年同期をやや下回り、輸出額は97億7977万円（同11.8%減）とかなり大きく下回った（図6）。

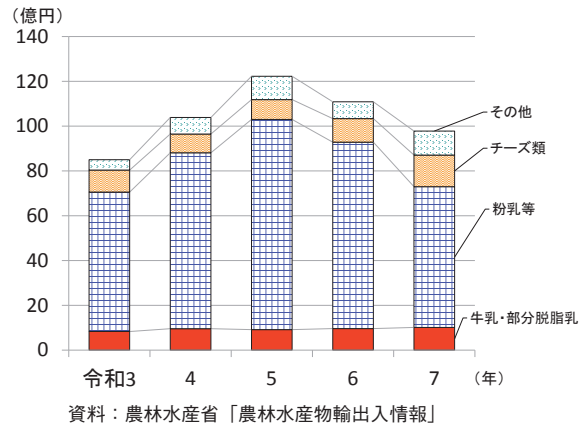
上期累計を品目別に見ると、牛乳・部分脱脂乳は3683トン（同5.5%増）と前年同期をやや上回り、チーズ類は804トン（同43.6%増）と前年同期を大幅に上回った。一方、粉乳等は、3612トン（同24.9%減）

と前年同期を大幅に下回った。粉乳等の9割以上を占める乳幼児用調製品は3486トン（同17.5%減）と、その他の粉乳も126トン（同78.4%減）と、いずれも前年同期を大幅に下回った。

国・地域別に見ると、輸出額ベースで最大の輸出相手先はベトナムであり、輸出額は39億4855万円（同38.8%減）、輸出量は2298トン（同30.6%減）と、いずれも前年同期を大幅に下回った。これは、ベトナム向けの9割以上を占める乳幼児用調製品が2070トン（同35.3%減）となったことによるものである。一方、輸出量ベースで最大の輸出相手先は香港となった。輸出量は3289トン（同7.2%増）と前年同期をかなりの程度上回り、輸出額も16億5731万円（同35.1%増）と大幅に上回った。香港向けの

7割以上を占める牛乳・部分脱脂乳が2404トン（同0.6%増）となったほか、乳幼児用調製品、チーズ類等でも量、金額のいずれも前年同期を上回った。

図6 酪農品輸出額の推移（1～6月累計）



（酪農乳業部 田中 麻紀）

鶏 卵

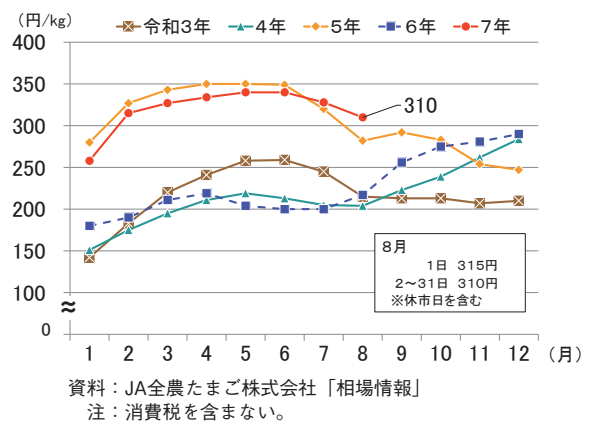
7年8月の鶏卵卸売価格、前年同月比42.9%高

卸売価格

令和7年8月の鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は、1キログラム当たり310円（前年同月差93円高、前年同月比42.9%高）と、前年同月を大幅に上回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同315円から休市日明けの4日には同310円に下落し、月末まで同額で推移し、月間の下落幅は同5円となった。なお、過去5カ年の8月の平均卸売価格は213円であり、それと比較しても、45.5%高と大幅に上回る結果となった。

供給面を見ると、気温の上昇により産卵率や卵重の低下が一定程度見られる。需要面を見ると、気温の上昇に伴い量販筋は減退傾向

図 鶏卵卸売価格（東京、Mサイズ基準値）の推移



にあるものの、業務筋では一定の需要が見られる。

家計消費量

7月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）^{（注）}は、899グラム（前年同月比7.4%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の7月の平均消費量との比較でも、1.4%増とわずかに上回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部 越川 紗弥）

令和6年「農業物価指数」について

農林水産省が令和7年7月30日に公表した「令和6年農業物価指数—令和2年基準—」について、概要を以下の通り報告する。

農業物価指数とは、農業における投入・産出の物価変動を表すもので、農産物価格指数と農業生産資材価格指数を用いて作成されている。農産物価格指数は農家が販売する農産物の生産者価格に関する指数であり、農業生産資材価格指数は農家が購入する農業生産資材価格に関する指数である。なお、これらすべての指数は、基準年の令和2年を100とした数値となっている。

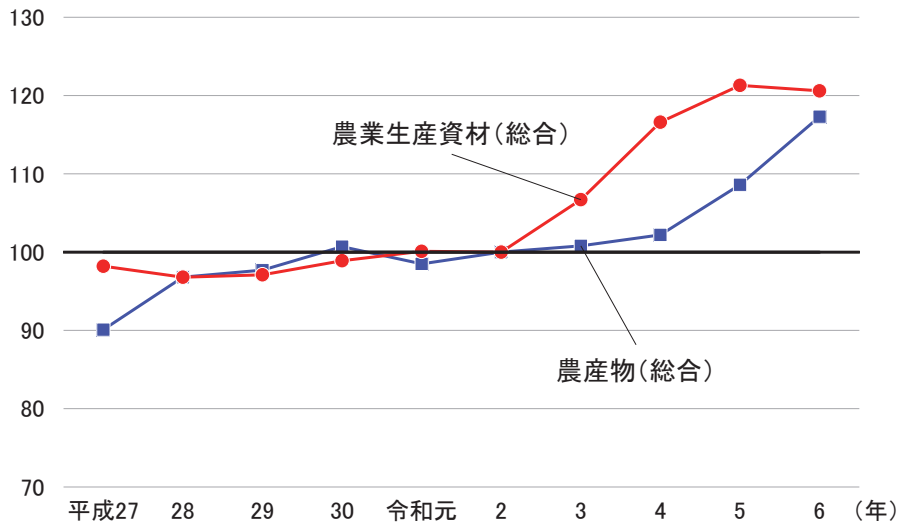
6年の農産物価格指数（総合価格指数（以下「総合」という））^{（注1）}は、鶏卵などの価格が低下したものの、米、野菜などの価格が上昇したことにより、前年に比べ8.0%上昇の117.3となった（図1）。農業生産資材価格指数（総合）^{（注2）}は、農機具などの価格が

上昇したものの、飼料、肥料などの価格が低下したことにより、同0.6%低下の120.6となった。過去10年間の推移を見ると、いずれも上昇傾向にあり、基準年の2年以降は、農業生産資材価格指数（総合）の上昇傾向が強くなっている。なお、両指数の差は、4年は14.4ポイント、5年は12.7ポイントであったが、6年は農産物価格指数（総合）が上昇した一方、農業生産資材価格指数（総合）が低下したことにより3.3ポイントに縮小した。

（注1）農産物価格指数（総合）の算出に用いる類別のウエートは、全体を100とした場合、米は15.72、いもは2.74、野菜は24.64、果実は9.66、花きは3.52、畜産物は39.05などとなっている。

（注2）農業生産資材価格指数（総合）の算出に用いる類別のウエートは、全体を100とした場合、畜産用動物は11.31、肥料は7.76、飼料は22.96、光熱動力は8.50、農機具は13.26、賃借料および料金は6.27などとなっている。

図1 農産物（総合）および農業生産資材（総合）の年次別価格指数の推移



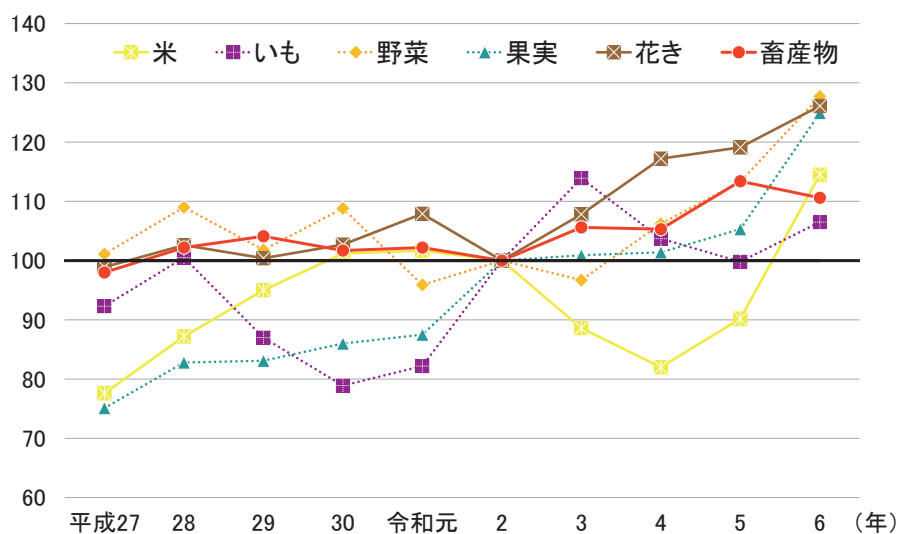
資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年＝100とする指数。

【農産物価格指数】畜産物は前年比2.5%低下

6年は、鶏卵の価格が特に年前半に低下したことなどから、前年に比べ2.5%低下の110.6となった（図2、3）。

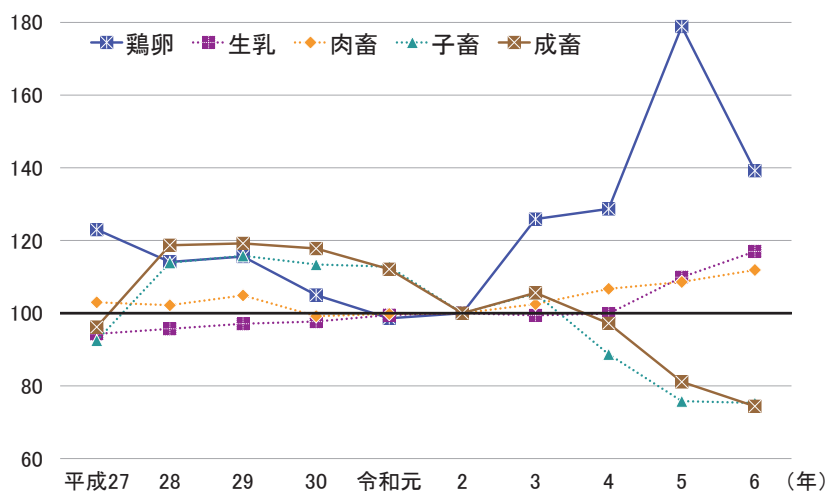
農産物のうち畜産物の価格指数を見ると、

図2 主な農産物の類別・年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年＝100とする指数。

図3 畜産物の品目別・年次別価格指数の推移

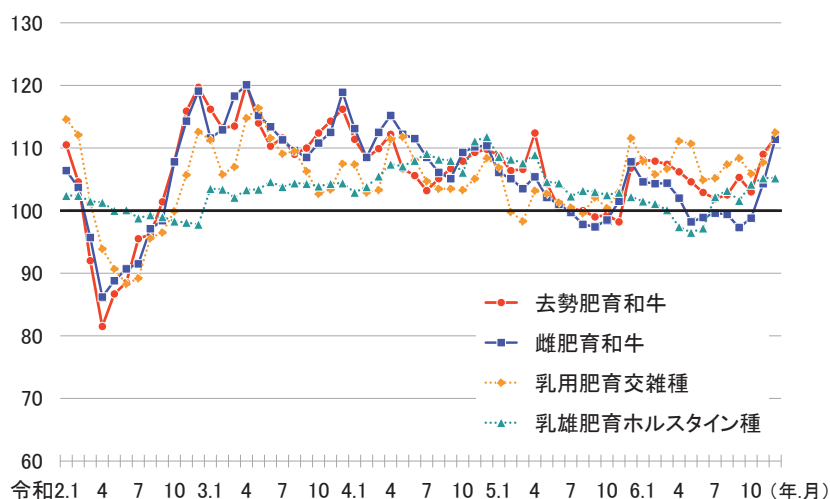


資料：農林水産省「農作物価指数」
注：令和2年＝100とする指数。

畜産物のうち肉用牛（肉畜）を見ると、近年の物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりなどの影響により、品種によっては100を下回る月があったものの、去勢肥育和牛および乳用肥育交雑種は年間を通して100

を上回って推移した。年平均では、去勢肥育和牛は同2.3%上昇の105.9、乳用肥育交雑種は同5.3%上昇の107.8、雌肥育和牛は同0.3%低下の101.9、乳雄肥育ホルスタイン種は同3.6%低下の101.2となった（図4）。

図4 肉用牛（肉畜）の月別価格指数の推移

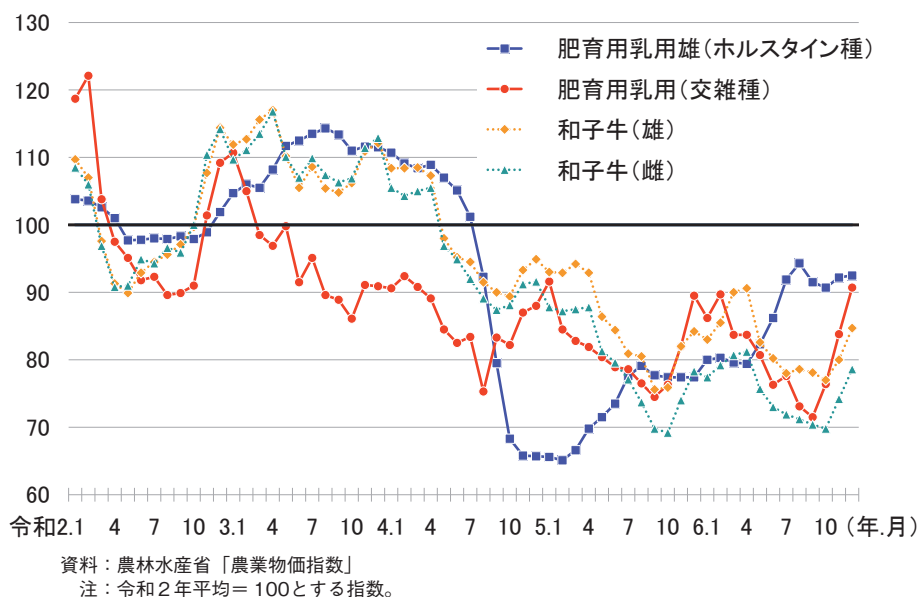


資料：農林水産省「農作物価指数」
注：令和2年平均＝100とする指数。

肉用子牛（子畜）を見ると、6年は、和牛枝肉価格の低迷や配合飼料価格が高水準にあることなどを背景に、肥育農家の子牛購買意欲が減退したことなどから下落傾向が継続し、前年に続き、全品種がすべての月で100を下回った。年平均では、和子牛（雌）は

同5.3%低下の75.3、和子牛（雄）は同3.4%低下の82.4、肥育用乳用（交雑種）は同0.4%低下の81.1となった一方、肥育用乳用雄（ホルスタイン種）は国産牛肉の需要の高まりや生産量の減少などを背景に同18.2%上昇の86.2となった（図5）。

図5 肉用子牛（子畜）の月別価格指数の推移



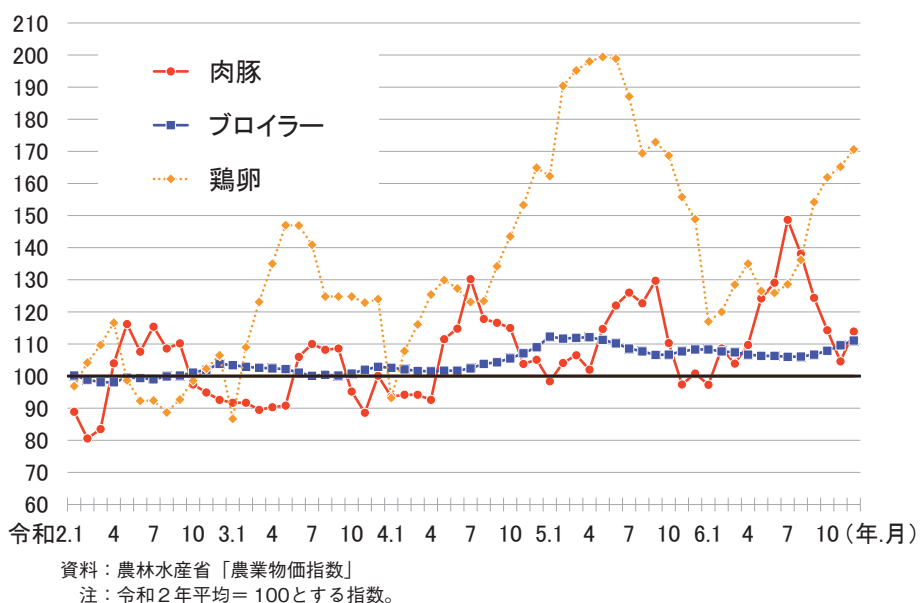
肉豚を見ると、6年は、節約志向の高まりによる牛肉からの需要のシフトなどにより引き続き堅調に推移し、ほとんどの月で100を上回った。年平均では、同6.2%上昇の118.1となり、3年連続で上昇した（図6）。

ブロイラーを見ると、6年は、継続した堅調な需要により、前年に続きすべての月で100を上回った。年平均では、同1.9%低下

の107.5となった。

鶏卵を見ると、6年は、高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の影響で加工用需要が減少していたが、年後半は猛暑による供給量の一時的な減少やHPAIの発生などにより上昇した。前年に続きすべての月で100を上回ったものの、年平均では、同22.2%低下の139.2となった。

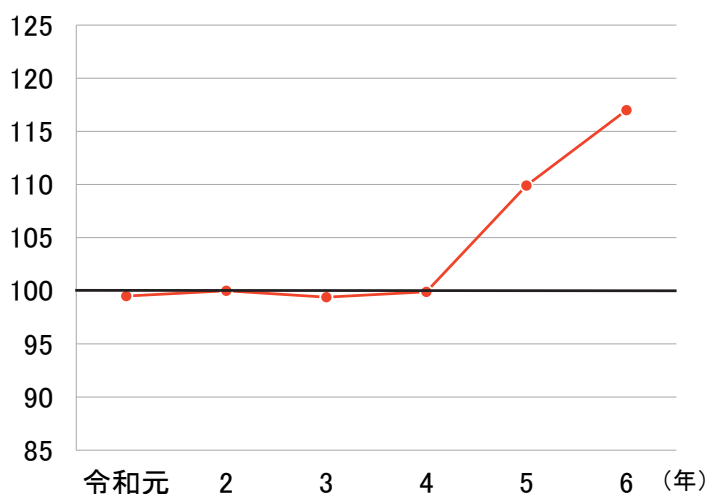
図6 肉豚、ブロイラー、鶏卵の月別価格指数の推移



生乳は昨年から7.1ポイント上昇して117.0となり、年次平均としては初めて110を超えた。これは、令和4年11月および5年8月に行われた飲用など向け乳価の値上げや、

5年4月の乳製品向け乳価の値上げなどによるものである。6年は3月を除いて115を超えて推移した（図7）。

図7 生乳の年次別価格指数の推移



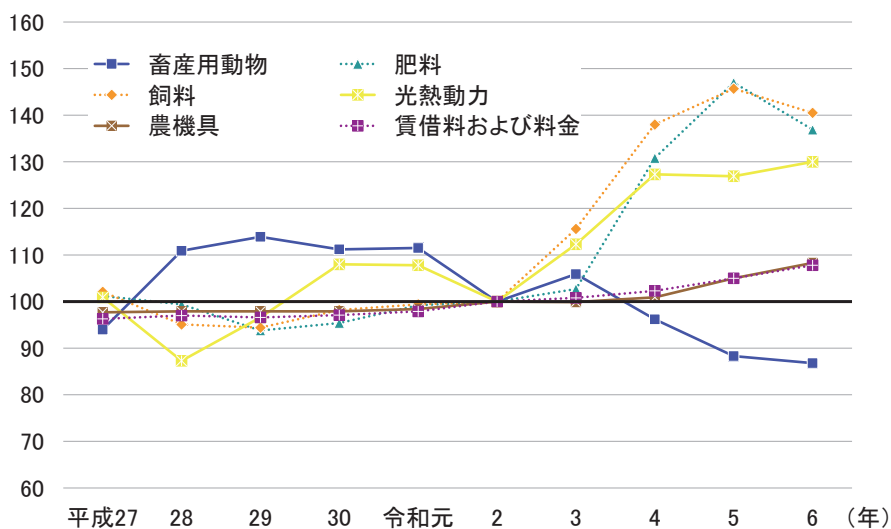
資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年＝100とする指標。

【農業生産資材価格指数】飼料は前年比3.6%低下

農業生産資材のうち畜産用動物の価格指数

を見ると、6年は、前年と比べ1.7%低下の86.8となり、3年連続で低下した。（図8）。飼料を見ると、配合飼料価格の低下などにより、同3.6%低下の140.5となった。

図8 主な農業生産資材の類別・年次別価格指数の推移



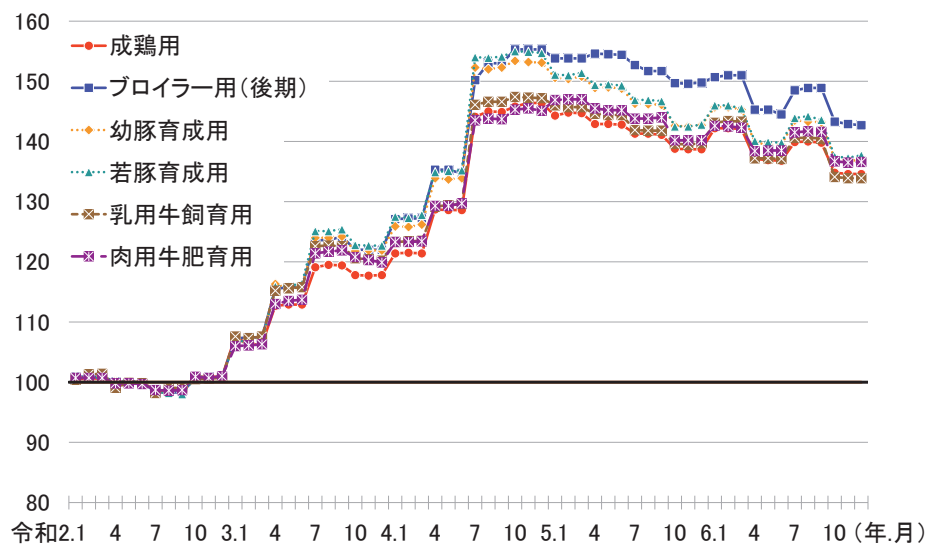
資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年＝100とする指数。

飼料のうち配合飼料を見ると、6年は、トウモロコシの価格が、主産国の米国や南米の需給などの動向を受けて下落したことなどから、年平均では、同3.2%低下の141.0となった。

品目別に見ると、いずれもすべての月で100を大幅に上回ったものの、低下傾向に

あり、年平均では、成鶏用は同2.5%低下の138.4、ブロイラー用（後期）は同3.7%低下の146.9、幼豚育成用は同3.9%低下の141.4、若豚育成用は同3.9%低下の141.8、乳用牛飼育用は同2.9%低下の138.7、肉用牛肥育用は同3.0%低下の139.8となった（図9）。

図9 配合飼料の品目別・月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和2年平均＝100とする指数。

（畜産振興部 小森 香穂、酪農乳業部 田中 麻紀）